

随 想

編集者へのメール

佐々木 教祐

平成元年に発足した健康文化振興財団の紀要として刊行されている「健康文化」は印刷物として発行されている600部の他にインターネット版の「健康文化」<http://www.met.nagoya-u.ac.jp/KENKOU/index.html>があり、最近は家庭への電子メール及びWWWの普及が進むとともにインターネット上での検索システムも充実してきており、キーワード検索で「健康文化」の記事を見つけて読む人が増えてきており、それに伴い電子メールによるご意見や問い合わせを受けることが多くなった。また健康文化もこの号で20号になり、記事の蓄積もかなりの量に達しており、古い記事でも十分に役立つことから読者が増えているものと思われる。

やはり一番多いのは知人の罹っている病気についての相談、その他にアレルギー、遺伝子治療など病気治療についての問い合わせである。この辺の相談は益々増えてくることと思われるが、医学部の知り合いにメールを転送して返事をもらっている現状では、質問者が満足する答えが返せるかどうかははなはだ疑問である。しかし現在では、病気についての相談を専門に受け付けているボランティアのWWWサイトもあるのでそちらの方にお任せするのがよいのではないかと考えているが、今後増えてくるこれらの相談を受け付ける公的なサイトもあっていいのではないかと考えている。

最近の読者は検索システムにキーワードを入力し、自分の必要な記事を検索して読むので、「音」、「ふぐ」、「アレルギー」など単語として興味のあるキーワードについての相談、質問、意見などのメールが多い。テレビ局からは「ふぐ中毒」について取材したいなどの電話もあるし、ある建設会社からの「ホールを作るための模型実験をすることになったのでノウハウを教えてください」などの実際的な相談もある。大学生からは「ふぐの毒の利用法を知りたい」などのレポートのテーマと思われるものもある。またある大学の先生から「学生の喫煙が増えているので、喫煙の影響についての青木先生の記事を読ませたいので使わせてほしい」、また看護系の女子大学生からは「女性という立場から受動的に喫煙する機会も多く、副流煙の持つ害についての研究をしたいので資料がほし

い」などタバコについての関心も高い。

最近の大学生はレポートを書くのに WWW を使う人が増えている。例えば、昨年12月にテレビを見ていた子供達が全身のけいれん発作を起こし病院にかつぎ込まれるという事件があった。このことについて調べようとすれば、WWWで探せばほとんどのことが分かるくらいの資料が集まる。ワープロに直接取り込むことのできる WWW の文章はレポートのネタとしては格好の材料であろう。

インターネット版の「健康文化」のメールの問い合わせ先は編集者になっているが、著者がメールアドレスを持っていれば、転送して返事を書いてもらっている。しかし半分以上の著者はメールアドレスを持っていないので詳細な返事を書くことは難しく、ほとんどは知人にメールを転送し、相談をして返事を書いている。

このようなインターネットによるコミュニケーションは今後ますます重要になってくると思われる。そこで私は返事を書いていただく側を、時間もあり経験も豊富な熟年の方たちをお願いする全国的な組織を作り、専門分野別に質問メールを割り振ればうまくいくのではないかと思っはいるが、熟年の方にもうまくメールを使っただけかどうかも含めてまだ具体的なことはしていない。電子メールによるコミュニケーションは今後ますます社会的重要性を増していくように思われる。

(名古屋大学情報文化学部教授)